

# 安部公房『燃えつきた地図』とナサニエル・ホー ソン「ウェイクフィールド」：安部公房のアメリカ文学受容とジャン＝ポール・サルトル、大橋健三 郎

大場， 健司  
九州大学大学院比較社会文化学府：修士課程

<https://doi.org/10.15017/1495362>

---

出版情報：九大日文．23， pp.95-113， 2014-03-31．九州大学日本語文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 安部公房『燃えつきた地図』とナサニエル・ホーソーン「ウエイクフィールド」

——安部公房のアメリカ文学受容とジャン＝ポール・サルトル、大橋健三郎——

大橋 健司

## 一、はじめに

安部公房（一九二四—一九九三年）が影響を与えたアメリカのポストモダン（postmodern）作家に、ポール・オースター（Paul Auster, 1947）がいる。オースターは安部からの影響を自認しており<sup>①</sup>、安部とオースターの関係は異孝之<sup>②</sup>やパトリシア・メリヴェイユ（Patricia Merivale）<sup>③</sup>らによつて指摘されてきた。オースターの『ニューヨーク三部作』（*The New York Trilogy*, 1987）<sup>④</sup>では、安部の『他人の顔』（講談社、一九六四年九月）や『燃えつきた地図』（新潮社、一九六七年九月）と同様に、都市空間を舞台にして失踪する主人公が描かれており、その影響関係を指摘できる。従来の先行研究では、主人公が失踪するという設定が、ナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne, 1804-1864）の短編小説「ウエイクフィールド」（“Wakefield,” 1835）に由来することが論じられており<sup>⑤</sup>、実際に作中でも「ウエイクフィールド」のあらすじが語られる場面がある<sup>⑥</sup>。ホーソーン「ウエイクフィールド」は、

ロンドンという都市を舞台に、妻を残して失踪した主人公を描いたテクストである。都市空間を背景にして、妻や恋人を残して失踪する主人公が描かれている点で、ホーソーン「ウエイクフィールド」とオースター『ニューヨーク三部作』、安部公房『他人の顔』、『燃えつきた地図』は明らかな類似を見せる。オースターは、失踪する主人公が描かれた安部のテクストをパロディ化する際に、ホーソーン「ウエイクフィールド」をも同時にパロディ化しており、おそらく、両者の類似性を十分に理解していたのではないだろうか。本稿では、安部の『燃えつきた地図』を読む際に、ホーソーン「ウエイクフィールド」との関係性を補助線にすれば、テクストをどのように読むことができるのかを論じることとする。さらに、安部のエッセイや講演での発言を同時代の言説の中でどのように位置づけることができるのかも検証したいと考えている。

## 二、ウエイクフィールド変形譚小史

——ナサニエル・ホーソーン、安部公房、ポール・オースター——

オースター『ニューヨーク三部作』とホーソーン「ウエイクフィールド」の関係性については、すでに多くの先行研究で論じられている。例えば、バリー・ルイス（Barry Lewis）は、オースターの『ニューヨーク三部作』全体にホーソーンの影響があり、オースターの主人公たちは失踪者を追いながら自らの自己同一性をなくしてしまうのだという。

The three novels of The New York Trilogy illustrate Hawthorne's moral that "by stepping aside for a moment, a man exposes himself to a fearful risk of losing his place forever." Silberman, Black, and Fanshawe are all Wakefields who have stepped aside from the routines of daily life to follow their own crazy visions, and it is one of the unique ironies of Auster's world that the very figures who look for these missing persons — Quinn, Blue, Fanshawe's friend — are themselves stripped of their former identities during their search.<sup>6</sup>

(『ニューヨーク三部作』の三つの小説は、「ちよつと脇道にそれると、人は自分の場所を永遠に失うという恐ろしい危険に身をさらすのだ。」というホーソーンの寓意を例証している。ステイルマンやブラック、ファンシヨーは皆、自身の狂気の幻影の後を追つて日常生活の仕事から脇道にそれてしまったウエイクフィールドなのだ。これはオースターの世界に独特のアイロニーであり、失踪者を追う当の本人——クイン、ブルー、ファンシヨー——は、捜査をするうちに、自分がかつて持っていた自己同一性をはぎ落とすのだ。)(拙訳、以下同)

ルイスはこの引用箇所において、オースター『ニューヨーク三部作』にはホーソーン「ウエイクフィールド」の影響があり、

主人公が失踪者を追つたりすることで「日常生活の仕事から脇道にそれ」、自己同一性を失ってしまうのだと論じている。「日常生活の仕事から脇道にそれ」てしまうというのは、オースター『ニューヨーク三部作』やホーソーン「ウエイクフィールド」の主人公たちが「失踪」することを指している。しかし、主人公が「失踪」する小説はホーソーン「ウエイクフィールド」以外にもあり、例えば安部公房の失踪三部作——『砂の女』(新潮社、一九六二年六月)、『他人の顔』、『燃えつきた地図』——においても、主人公が「失踪」を果たすことになる。「失踪者を追う当の本人」が「捜査をするうちに、自分がかつて持っていた自己同一性をはぎ落とす」という特徴は、安部『燃えつきた地図』にも言えることである。本稿では、失踪者を扱ったテクストという点で、ジャンルのにも類似を見せる安部『燃えつきた地図』とホーソーン「ウエイクフィールド」の関係性を探ることにする。

ホーソーンの短編集『トワイヌ・トルルド・テールズ』(Twice-Told Tales, 1837)に収録された「ウエイクフィールド」は、ロンドン(London)という都市を舞台にして、妻を残して二〇年以上失踪してしまう主人公を描いた短編小説である。主人公は失踪したといつても、もとの自分の家のすぐ隣りに部屋を借りて住みながら、妻を見張っていたのだった。ホーソーンは、この物語が再現される可能性について、次のように述べている。

But the incident, though of purest originality, unexampled, and

probably never to be repeated, is one, I think, which appeals to the general sympathies of mankind. We know, each for himself, that none of us would perpetrate such a folly, yet feel as if some other might.<sup>50</sup>

(しかし、この出来事は、その獨創性には類いまれな純粹さがあり、先例もなく、おそらく繰り返されることもないだろうが、私が思うには、人類の普遍的な共感に訴えるものだろう。我々は皆、誰もそのような愚かなことをしたりはしないことを知っているが、誰かがしてしまうのではないかと感じてはいるのだ。)

ここでホーソーンは「おそらく繰り返されることもないだろうが」とは言いつつも、「誰かがしてしまうのではないかと感じてはいる」と述べている。「ウエイクフィールド」が収録されている短編集『トワイヌ・トールド・テールズ』のタイトルを『二度語られた物語』というタイトルで翻訳することができると、ホーソーンは作品とくに「ウエイクフィールド」は他の作家たちによって「二度語られる」ことになる。最近では、アルゼンチンの作家エドゥアルド・ベルティ (Eduardo Bert, 1964) が、ホーソーン「ウエイクフィールド」の物語を失踪者の妻の視点から描いた長編小説『ウエイクフィールドの妻』(La Mujer Wakefield, 1999) を発表している<sup>51</sup>。ホルヘ・ルイス・ボルヘス (Jorge Luis Borges, 1899-1986) は、ホーソーン「ウエイクフィールド」を「フランツ・カフカ (Franz Kafka, 1883-1924) が登場する

半世紀以上前のアメリカで書かれたカフカの小説だと評している<sup>52</sup>。ホーソーン『ホーソーン短編小説集』(坂下昇訳、岩波書店、一九九三年七月)の「訳注」で、坂下昇は「もしカフカがこの話を書いていたら、ウエイクフィールドを家に戻らせなかつたろう。」<sup>53</sup>と書いているが、失踪者を「家に戻らせ」ずに、カフカの「ウエイクフィールド」の物語を反復させたのが、オースター『ニューヨーク三部作』である。安部公房の『他人の顔』や『燃えつきた地図』といった、都市を舞台に「失踪」を描いた作品もまた、この系列に含まれるのではないかと考えられる<sup>54</sup>。

一九世紀中頃のアメリカ文学では、「都市」を舞台にした作品が多数、書かれることになる。一八二〇年から一八六〇年に至るまでに、ニューヨーク (New York) やフィラデルフィア (Philadelphia)、ボルティモア (Baltimore) といった都市の人口が急上昇したことを背景にして、都市の群衆や無名性を描いた作品が書かれたのである<sup>55</sup>。その代表が、エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809-1849) の「群衆の人」(“The Man of the Crowd,” 1840) や世界初の探偵小説である「モルグ街の殺人」(“The Murders in the Rue Morgue,” 1841)、ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819-1891) の短編集『ピザ物語』(The Piazza Tales, 1856) に収録された「バートルビー」(“Bartleby,” 1853) などであった。

安部が都市を舞台にした小説を描いた背景にも都市化の問題があった。安部は『砂の女』で砂丘という「辺境」を舞台にして失踪者を描いたが、『他人の顔』や『燃えつきた地図』では

「都市」を舞台にして失踪者を描くことになる。その背景に一九六〇年代における日本の都市化があったことを、波瀾剛が論じている。<sup>44)</sup>

ホーソンと安部の関係性については、これまでの先行研究ではあまり論じられたことがないが、パトリシア・メリヴェールは、その間テクスト性 (intertextuality) に注目している。

Hawthorne's "Wakefield" for instance, that paradigmatic metaphysical Missing Person story, is as notable an intertext for Auster as it was earlier for Abe.<sup>45)</sup>

(例えば、ホーソンの「ウェイクフィールド」は、模範的な形而上学的失踪者小説であり、安部にとつてはさらに早くからそうであったように、オースターにとつても重要な間テクストであった。)

また、ホーソン「ウェイクフィールド」とポストモダン探偵小説の関係を論じたりチャード・スウォープ (Richard Swope) の論文では、「ウェイクフィールド」のように「失踪」を扱った文学作品が、居を定めることができない探偵を描く「中間的なウェイクフィールド」(in-between Wakefield)、都市で迷つてしまふ探偵を描く「都市のウェイクフィールド」(urban Wakefield)、現実の世界の物理的な限界を超越するSF的な「超自然的なウェイクフィールド」(supernatural Wakefield)に分類されている。<sup>46)</sup>「都市のウェイクフィールド」の代表として、トマス・ピンチョン

(Thomas Pynchon, 1937) の『競売ナンバー49の叫び』(The Crying of Lot 49, 1966) やポール・オースターの『ガラスの街』が挙げられているが<sup>47)</sup>、安部公房の『他人の顔』や『燃えつきた地図』もまた、この系譜に入るのではないかと考えられる。「都市」を舞台にして「失踪」と夫婦関係を描いている点で、ホーソンが安部に影響を与えている可能性がある。メリヴェールが言うように、安部にとつて「ウェイクフィールド」が重要な間テクストであるとすれば、『燃えつきた地図』のテクストをどのように読み、安部の思想をどのように論じることができるだろうか。

### 三、「既成事実」からの「失踪」

#### ——『燃えつきた地図』と『ウェイクフィールド』

ホーソン「ウェイクフィールド」が、安部『燃えつきた地図』に影響を与えているのだとすれば、安部のテクストのどの箇所に、その痕跡を発見することができるのだろうか。「燃えつきた地図」では、都市を舞台にして、妻を残して失踪した男を探す探偵が逆に失踪してしまうまでが描かれている。「燃えつきた地図」と海外文学の関係性については、丁熹貞がハードボイルド (hard-boiled) 作家ダシール・ハメット (Samuel Dashiell Hammett, 1894-1961) の『赤い収穫』(Red Harvest, 1929) との関係性を文学の記録性の観点から論じている。<sup>48)</sup> それでは、ホーソンからの影響として考えることが可能な箇所を、単語レベルで

論じてみよう。ここでは、『燃えつきた地図』の主人公が最終的に失踪してしまう直前の場面を引用することにする。

そこでぼくは、ゆつくりと立ちどまる。空気のバネに押しもどされたように、立ちどまる。左足のつま先から、右足の踵にうつしかけた重心が、また逆流してきて、左の膝のあたりにずつしりと重みをかける。道の勾配がかなり急だからだ。<sup>(19)</sup>

しかしぼくは、思いがけなく立ちどまる。空気のバネに押しもどされたように、立ちどまる。ふだんは気にもとめなかった、この坂道の光景の、奇妙に鮮明な印象に、つい尻込みしたような気持で、立ちどまる。立ちどまつた理由は、ぼくなりには、むろん分かってはいたが、しかし信じがたいことだった。なにしろぼくは、このすぐ先の、カーブの向うにあるはずの光景を——いま目になっている、この坂の途中と、同じくらいよく見知っているはずの風景を——なぜかどうしても思い出すことが出来なかったのである。<sup>(20)</sup>

この二つの引用箇所で、主人公は「立ちどまる」。この場面では、『燃えつきた地図』の冒頭で主人公が依頼人の住む団地に向かう場面の描写が反復されており、同じ団地が差異を含んだ観点から描かれることになる。波瀾剛によれば、このテクス

トの冒頭では、主人公は団地の中を自動車に乗って移動するが、主人公が歩きながら団地に向かい「立ちどま」ってしまうのは、「社会的関係を放棄した主人公と団地の生活者との断絶のためだ」という<sup>(21)</sup>。主人公は失踪する直前まで「よく見知っているはずの風景」を「ふだんは気にもとめなかった」。したがって、それまではこの風景が何であるかという「本質」(essence)を主人公は規定していたことになるだろう。「カーブの向うにあるはずの光景」とは、イマヌエル・カント (Immanuel Kant, 1724-1804) が言う「物自体」(thing in itself)のように「見えないもの」なのである<sup>(22)</sup>。その「見えないもの」が「いま目になっている、この坂の途中と、同じくらいよく見知っているはずの風景」に発見され、自分が以前規定した「本質」には還元不可能な複数性を有するものとして提示されているのである。それは主人公の見る「世界」に差異が与えられ「異化」されたことを示しているだろう。主人公が「立ちどまる」のはこのときである。

実は、主人公が「立ち止まる」という、この身ぶりは、ホーソン「ウエイクフィールド」にも登場する。次に引用するのは、ウエイクフィールドが失踪した次の日に、失踪前の自分の家を見たときの場面である。

He gathers courage to pause and look homeward, but is perplexed with a sense of change about the familiar edifice, such as affects us all, when, after separation of months or years, we again see some hill or lake, or work of art, with

which we were friends, of old. In ordinary cases, this indescribable impression is caused by the comparison and contrast between our imperfect reminiscences and the reality. In Wakefield, the magic of a single night has wrought a similar transformation, because, in that brief period, a great moral change has been effected.<sup>(23)</sup>

(彼は勇気をふりしぼって立ち止まり、家の方を見てみるが、よく知っているはずの建物がいつもとは違う感じがして、当惑してしまう。何ヶ月か何年か離れてから、昔から親しんでいた丘や湖、芸術作品をもう一度、見たときに襲われる感覚である。普通の場合は、この形容できない印象は、われわれの不完全な記憶と現実との比較と差異によってもたらされるだろう。ウェイクフィールドの場合は、同じ変身を一晚の魔法がもたらしたのだ。この短い間に、大きな道徳上の変化が引き起こされたからであった。)

この引用箇所では、ウェイクフィールドは「よく見知っているはずの建物」に差異を感じる。「失踪」を果たすことで、「大きな道徳上の変化」が生じ、主人公のものの見方に「異化」が生じたのである。その家は「同じもの」でありながらも「差異」を含んで反復する。主人公が「立ち止まる」のは、この「差異」を感じたときである。「失踪」によって「大きな道徳上の変化」がもたらされることで、ウェイクフィールドが「差異」を感じる一方で、安部の『燃えつきた地図』の主人公の場合は、一種

の記憶喪失になることで「カーブの向うにあるはずの光景」を思い出すことができなくなり、「都市」の風景に「差異」を発見する。主人公が、よく知っているはずのものに「差異」を発見して「立ち止まる」という点で、『燃えつきた地図』と「ウェイクフィールド」は類似を見せる。

安部とホーソーンのテクストに違いがあるとするれば、この「差異」が安部のテクストでは実存主義 (existentialism) 的に描かれているところにあるだろう。「カーブの向うにあるはずの光景」とは、カント的「物自体」、ジャン＝ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980) 的「実存」 (existence) を表すものとして言い換えられるだろう。「吐き気がこみあげてきた。見えないものを、むりに見とどけようとして、目をこらしすぎたせいかもしれない。吐き気に、めまいまでが加わってきた。」<sup>(24)</sup>とあるように、『燃えつきた地図』の主人公は「不在」の「見えないもの」を見ようとして「吐き気」を感じている。「カーブの向う」にある「見えないもの」とは、「現象」 (phenomenon) の世界の外部にある「観界界」 (intelligible world) の「物自体」であり、「本質」には還元不可能な「実存」なのである。「実存」に対して「吐き気」を感じているという点で、サルトル『嘔吐』 (La Nausée, 1938) が想起される。例えば、『嘔吐』では、主人公が公園で、「本質」には還元不可能な「マロニエの根」を見て「吐き気」に襲われる場面がある。

私は、肩の荷が下りたとも、満足しているとも言うことは

できない。反対に、私は圧倒されている。ただ私の目的は達せられた。知りたいと思ったことを知ったのである。一月以来私に起ったことを、すべて理解した。(吐き気)は私から離れなかつたし、それがすぐに離れるだろうとも思わない。しかし私はもう、吐き気には襲われまい。吐き気とは、もはや病気でも、一時的な咳込みでもなく、この私自身なのだ。

さて、いしましたが、私は公園にいたのである。マロニエの根は、ちょうど私の腰掛けていたベンチの真下の大地に、深くつき刺さっていた。それが根であることを、もう思いだせなかつた。言葉は消え失せ、言葉とともに事物の意味もその使用法も、また事物の表面に人間が記した弱い符号もみな消え去つた。いくらか背を丸め、頭を低く垂れ、たつたひとりで私は、その黒い節くれだつた、生地そのままの塊とじつと向かいあつていた。その塊は私に恐怖を与えた。それから、私はあの天啓を得たのである。<sup>(55)</sup>

ここでは、「マロニエの根」の「実存」は、「それが根であること」に対して現象学的還元(phenomenological reduction)を行うこととで発見されている。その現象学的還元は、主人公が「マロニエの根」の「本質」を「思いだせなかつた」という、ある種の記憶喪失とおして行なわれている。この点が、安部『燃えつきた地図』の主人公が失踪直前に記憶喪失のような状態に陥っていることと類似を成している。

つまり、ホーソーンが「ウエイクフィールド」で描いた、主人公が「よく見知っているはずの建物」に「差異」を発見して「立ち止まる」場面を、安部は『燃えつきた地図』において、サルトルの『嘔吐』で描かれた、「実存」に直面したときの「吐き気」の感覚を応用して描いているのである。

また、他にも安部とホーソーンのテクストに共通して登場する言葉がある。それは「微笑」である。安部『燃えつきた地図』の主人公は、物語の最後、失踪する直前に、猫の死骸に名前をつけてやろうとして、「贅沢な微笑が頬を融かし、顔をほころばせる」<sup>(56)</sup>。この「微笑」もまた、ホーソーン「ウエイクフィールド」を想起させるものである。「ウエイクフィールド」の場合にも、主人公が「失踪」する直前に顔に「微笑」(smile)を浮べる場面が登場する。また、この「微笑」は一九三四年八月に岩波文庫で刊行された佐藤清訳でも「微笑」と翻訳され<sup>(57)</sup>、大橋健三郎訳(一九八〇年四月)<sup>(58)</sup>や坂下昇訳(一九九三年七月)<sup>(59)</sup>、國重純二訳(一九九四年一〇月)<sup>(60)</sup>などのほとんどの翻訳で「微笑」という言葉で翻訳されている。

After the door has closed behind him, she perceives it thrust partly open, and a vision of her husband's face, through the aperture, smiling on her, and gone in a moment. For the time, this little incident is dismissed without a thought. But, long afterwards, when she has been more years a widow than a wife, that smile recurs, and flickers across all her

remembrances of Wakefield's visage. In her many musings, she surrounds the original smile with a multitude of fantasies, which make it strange and awful; as, for instance, if she imagines him in a coffin, that parting look is frozen on his pale features; or, if she dreams of him in Heaven, still his blessed spirit wears a quiet and crafty smile. Yet, for its sake, when all others have given him up for dead, she sometimes doubts whether she is a widow.<sup>(31)</sup>

(彼の後ろでドアが閉まると、ドアがすこし開いているのに彼女は気が付いた。すきまから、彼女に微笑んでいる夫の顔が見え、それはすぐに消えた。その時は、この小さな出来事を気にすることもなく、忘れてしまっていた。しかし、ずっと後になつて、妻だった時間よりも未亡人である時間が長くなると、その微笑が思い出されてウエイクフィールドの顔の記憶の中で明滅するのだった。彼女がたくさん物思いにふける中でも、この風変わりな微笑には多くの空想を連想し、それがその微笑をさらに奇妙で恐ろしいものにするのだった。例えば、彼が棺桶に入っているのを想像すると、その青白い顔立ちの上に、彼が失踪したときの表情が凍りついていたのだった。あるいは、彼が天国にいるのを想像すると、依然として彼の神聖な魂は、穏やかで悪賢い微笑を浮べているのだった。その微笑のために今なお、他のみんなが彼は死んだと諦めていても、彼女には自分が未亡人かどうかを疑うときがあるのだ。)

ウエイクフィールドの「微笑」は、「失踪」する直前に彼が残したものだ。つまり、主人公が「不在」の存在となる瞬間に残された「痕跡」として「微笑」は描かれているのである。ウエイクフィールドの妻は、彼が「棺桶に入っている」場面や「天国にいる」場面を想像し、彼がこの世にはいない「不在」の存在であるのを想像するたびに、彼の「微笑」を思い出す。そして、その「微笑」は「自分が未亡人かどうか」を疑わせる。この「微笑」は、ウエイクフィールドが二〇年間の失踪を経て自分のもとの家へと帰る際にも描かれている。<sup>(32)</sup>

The door opens. As he passes in, we have a parting glimpse of his visage, and recognize the crafty smile, which was the precursor of the little joke, that he has ever since been playing off at his wife's expense.<sup>(33)</sup>

(ドアが開く。彼がまたいで入ると、われわれは彼の顔との告別の一瞥をし、悪賢い微笑に気づく。それは、自分の妻を犠牲にして行われた、ちょっとした冗談の前兆だったものである。)

つまり、この「微笑」は、ウエイクフィールドが「不在」と「現前」の間を行き来する際に描かれている表情なのである。安部公房の『燃えつきた地図』でもまた、主人公が失踪直前に「微笑」する場面がある。

過去への通路を探すのは、もうよそう。手書きのメモをたよりに、電話をかけたたりするのは、もう沢山だ。車の流れに、妙なよどみがあり、見ると轢きつぶされて紙のように薄くなった猫の死骸を、大型トラックまでがよけて通ろうとしているのだった。無意識のうちに、ぼくはその薄っぺらな猫のために、名前をつけてやろうとし、すると、久しぶりに、贅沢な微笑が頬を融かし、顔をほころばせる。<sup>(34)</sup>

『燃えつきた地図』の主人公は「轢きつぶされて紙のように薄くなった猫の死骸」に名前をつけようとして、「贅沢な微笑が頬を融かし、顔をほころばせる」。この一場面を考える際に重要な手掛かりを与えてくれるのが、沖繩出身の詩人、山之口貌（一九〇三―一九六三年）の詩集『鮪に鯛』（原書房、一九六四年二月）に収録された詩「ねずみ」である。

生死の生をほつぼり出して

ねずみが一匹浮彫みたいに

往來のまんなかにもりあがっていた

まもなくねずみはひらたくなつた

いろんな

車輪が

すべつて来ては

あいろんみたいにねずみをのした

ねずみはだんだんひらたくなつた

ひらたくなるにしたがつて

ねずみは

ねずみ一匹の

ねずみでもなければ一匹でもなくなつて

その死の影すら消え果てた

ある日 往來に出て見ると

ひらたい物が一枚

陽にたたかれて反つていた<sup>(35)</sup>

安部の「猫」と山之口の「ねずみ」の描写は明らかに類似しており、どちらも自動車にひかれて薄くなった動物を描いている。安部の「見ると轢きつぶされて紙のように薄くなった猫の死骸」の一節と対応するのが、山之口の「ある日 往來に出て見ると／ひらたい物が一枚／陽にたたかれて反つていた」の一節である。安部が山之口の詩を受容したと考えた場合、なぜ「ねずみ」ではなく「猫」を登場させたのだろうか。山之口の詩集『思弁の苑』（むらさき出版部、一九三八年八月）に収録された詩「猫」では、「蹴つ飛ばされて」も「落つこちるといふことのない身軽な獣」として「猫」が描かれている<sup>(36)</sup>。安部の場合逆に、山之口「ねずみ」で描かれたような「猫」を描いている。安部の『燃えつきた地図』が、失踪者を追う探偵が失踪者になる物語であることに留意した場合、「ねずみ」を追う「猫」が「ねずみ」になつたのだとも考えられる。『燃えつきた地図』の主

人公が「微笑」を浮べるのは、山之口が「ねずみ」には与えなかつた名前を「猫の死骸」に与えようとする瞬間である。「猫の死骸」についての文章が登場する前に、主人公は「既知の世界」について考えている。

誰だつて、どんな健康な人間だつて、自分の知つてゐる場所以外のことなど、知つてゐるわけがないのだ。誰だつて、今のぼくと同じように、狭い既知の世界に閉じ込められてゐることに変わりはないのだ。<sup>(37)</sup>

安部がここで言う「世界」とはカント的「現象界」のようなものだろう。この引用箇所では、自分が知ることのできる「世界」の限界についての指摘がある。ここでは二回、「誰だつて」という言葉が登場しており、自分の知ることのできる、「悟性」(understanding)で理解できる「世界」が有限であることが示される。この作品で言う「カーブの向う」とは、そのような「世界」の「外部」にある世界を示すものである。「地図」という「世界」には還元不可能な「物自体」の世界こそが「存在しなから存在しない、あのカーブの向う」<sup>(38)</sup>の世界なのだ。そして人間は絶えず「既知の世界」に閉じ込められている。この「既知の世界」と「猫の死骸」の關係について、友田義行は次のように言っている。

野生を保つたまま都会にもぐりこむ猫。そして「既成事

実と称される権威ある存在」の象徴でもある猫。既成概念に覆われた表層的な都市風景の反転位置に落ちこんだ探偵は、モノをモノとして見る「野生」の眼をもつた猫と対面し、新しい独自の名づけを予感させて、まっすぐに歩き去る。逡巡を繰り返してきた探偵は、ついに立ちどまることをやめるのだ。<sup>(39)</sup>

「猫」が「既成事実と称される権威ある存在」ならば、なぜこの「猫」は「猫の死骸」として登場しているのだろうか。主人公は一種の記憶喪失に陥ることで、サルトル『嘔吐』の主人公同様に、自分が知つてゐるものの「本質」を現象学的還元し、「カーブの向う」にあるサルトル的「実存」、カント的「物自体」へと向う<sup>(40)</sup>。「猫」が「死骸」として登場しているのは、「既成事実」に対して現象学的還元が行なわれてゐるからである。つまり、「猫」の死とは「既成事実」の死を表しているのである。それは、知つてゐると思つたものが知らないものへと変貌することである。我々が「知つてゐる」と思つても、それは「現象」の世界における「仮象」(appearance)に過ぎない。「既成事実」が死ぬとき、その「仮象」は現象学的還元される。すなわち、「既成事実の世界」の内部に「カーブの向う」にある還元不可能なものが発見されるのだ。主人公が「猫の死骸」に名前を与えるとき、「既成事実」には還元不可能なものが発見され、それに主人公が名前を与える。主人公が「微笑」をするのは、この瞬間である。山之口が、「ねずみ」が「ねずみ」であると

いう「既成事実」に対して現象学的還元を行い、「ねずみでもなければ一匹でもない」「一枚」を提示したように、安部『燃えつきた地図』の主人公は「既成事実」を現象学的還元し、更に、「既成事実」には還元不可能な固有名を与えるのである。

ホーソーン「ウエイクフィールド」の「微笑」が、主人公が失踪するとき、及び二〇年間の失踪を経てもとの自宅に帰るときに顔に浮べるものであるとするならば、安部『燃えつきた地図』の「微笑」とは、主人公が「既成事実」から「失踪」を果たす瞬間に浮べる表情だろう。この「微笑」は、安部がホーソーン「ウエイクフィールド」と山之口「ねずみ」を受容し、それを実存主義的に応用したという可能性を示唆している。ホーソーンが失踪後に自宅に帰る失踪者を描いたのだとすれば、安部は、自宅にも帰らず共同体内部の「既成事実」にも回収されない、実存主義的な「失踪」を描いたことになるだろう。

#### 四、安部公房のアメリカ文学受容

——ジャン・ポール・サルトルと大橋健三郎

安部が『燃えつきた地図』を書くにあたり、ホーソーンを受容していたのだとすれば、安部のエッセイや講演での発言をどのように読むことができるのだろうか。ここでは、ホーソーンやアメリカ文学を補助線として引きながら、安部の思想を論じていくことにする。

『燃えつきた地図』が発表された一九六七年前後に、安部は

エッセイや座談会などで、「都市」の問題を扱うようになる。安部は一九六四年八月二十七日から三週間、ソ連に滞在し、その後、ドイツとチェコ、アメリカに向い、一〇月末に日本に戻っている。エッセイ「モスクワとニューヨーク」(『東京新聞』夕刊、一九六四年二月二六―二七日)では、モスクワ (Moscow) とニューヨークという二つの大都市に共通する「孤独」と「焦燥感」が論じられている。<sup>(41)</sup>その後、安部は「戦後アメリカ文学——ヘンリー・ミラーとその他の作家たち」(『世界文学』一九六五年一月号)と題され、大橋健三郎が司会を務めた座談会に参加している。この座談会で安部は、モスクワとニューヨークに行ったことに触れながら、「隣人」と「他人」という概念を提示している。「隣人」が「相互理解の可能なもの」である一方、「他人」は「疎通できないもの」なのだという。<sup>(42)</sup>そして、アメリカ文学について次のように言っている。

いま、家庭つてものがしばしばアメリカで書かれるつて言うけど、やっぱりアメリカで書かれる家庭つていうものは、隣人の喪失ですね。そこから、他人というものが発見されて来ずにですね、何か隣人の喪失というところで低迷して、それが悲劇として訴えられている限りにおいては、ヨーロッパ文学や、それから一九世紀文学なども変わりはないんじゃないですか。やっぱりアメリカの持っていた可能性としては、他人に直結していく、つまり隣人を媒介とせず他人を発見していくというような可能性がですね、恐

らくまあ、ソ連でも一時期あったでしょうし……<sup>(43)</sup>

ここで安部は、アメリカの一九世紀文学では家庭での隣人の喪失が悲劇として描かれていると述べている。アメリカの一九世紀文学で「隣人の喪失」が描かれた文学としてはやはり、夫が妻を残して失踪するホーソン「ウエイクフィールド」が想起される。この「一九世紀文学」を「ウエイクフィールド」のことだと考えた場合、安部にとつては「隣人の喪失」を越えて「他人の発見」を書かなければならないことになるだろう。安部が『燃えつきた地図』でホーソンを受容していたとすれば、ホーソンを超えて失踪者の物語を書いたことになる。

その後、安部は講演「私の創作ノート」(第二回新潮社文化講演会、一九六六年四月二三日、新宿・紀伊國屋ホール)やエッセイ「隣人を越えるもの」(『現代芸術と伝統』合同出版、一九六六年一月)などで「隣人」／「他人」とキリスト教の関係について考えを深めている。ここではキリスト教について次のように言っている。

キリスト教というものは隣人というものを無制限に、自分たちの隣人感覚を超えて、論理的隣人というものをとらえて、それを無限に拡大することによって他者を征服する、というイデーがあるわけです。<sup>(44)</sup>

ここでは、「隣人」／「他人」の問題がなぜ、キリスト教と繋がられているかが問題である。メリヴェイルが言うように、

安部が『他人の顔』<sup>(45)</sup>や『燃えつきた地図』といった失踪者の物語を書くにあたり、ホーソンを意識していたのだとすれば、ホーソン『緋文字』(The Scarlet Letter, 1850) がセイラム魔女裁判 (Salem witch trials, 1692) を題材にして、ピューリタン二ズム (Puritanism) による他者の排除を描いていることが重要だろう<sup>(46)</sup>。安部と同時代の作家では、アーサー・ミラー (Arthur Miller, 1915-2005) が、この魔女裁判に題材をとつて、ジョセフ・マッカーシー (Joseph Raymond McCarthy, 1908-1957) による赤狩りを批判した戯曲『るつぼ』(The Crucible, 1953) を発表している。この戯曲はサルトルの脚本で映画化 (Les Sorcières de Salem, 1957) されている<sup>(47)</sup>。安部が「隣人」／「他人」というテーマをキリスト教と結びつけた際には、ホーソンやアーサー・ミラー、サルトルらによってテーマにされた、魔女裁判や赤狩りにおける他者の排除の問題があつたのではないだろうか。

講演「続・内なる辺境」(安部公房の講演と「靴」試演の会、一九六九年八月一七―一八日、新宿・紀伊國屋ホール)では、「隣人」／「他人」の問題が、都市／農村という二項対立を扱った文脈で論じられ、国家に対抗するには共同体内部の「隣人」を拒否しなければならぬと述べられている<sup>(48)</sup>。ここで重要なのは、安部がエッセイ「内なる辺境」(『中央公論』一九六八年一月―二月号)において、「都市」を「移動社会」と見なし、「農村」を「定着国家」と見なしていることだろう<sup>(49)</sup>。国家を内部から破壊する「都市」の発見である。同時代の言説に注目した場合、この都市のノマドロジー (nomadologie) とでも言うべき移動性と、サルトル

の評論集『シチユアシオンⅢ』(Simulations III, 1949)に収録された「アメリカの都市」(“Villes d’Amérique”, 1945)の類似性を指摘することができる。サルトルは「アメリカの都市が起源においては砂漠の野営であること」<sup>(50)</sup>を悟り、次のように述べる。

しかしいまだにフォンタナや、西部辺境の露営にあんなにも似ているこれらの浅薄な都市は、合衆国の他の一面、すなわちその自由を示している。ここでは各人が自由である。風俗を批判したり、改革する自由ではなく、風俗を逃れ、砂漠、或いは他の都市に去る自由である。都市は開いている。世界に向い、未来に向つて開いている。これがこれらすべての都市に定めなき風貌を与え、その混乱、その醜悪さそのものの中に、一種の感動的な美を与えているのである。<sup>(51)</sup>

先行研究では、安部のアメリカ論「アメリカ発見」(『中央公論』一九五七年一月号)にカフカ『アメリカ』(Der Verschollene, 1927)やサルトル「アメリカの都市」の影響があることは指摘されていたが<sup>(52)</sup>、安部の都市論にもサルトルの影響があるのではないだろうか。安部はサルトルがアメリカの都市に発見した「移動の自由」を主張するのみならず、そこに国家への抵抗を見いだしている。

また、アメリカの都市との関連で言えば、大橋健三郎のアメリカ文学論『荒野と文明——二十世紀アメリカ小説の世界』(研

究社、一九六五年二月)が重要である。安部「内なる辺境」のテーマであった都市／国家や移住／定着、及びユダヤ人文学の問題がすべて、この研究書の中で扱われている。第一部「荒野と文明について」と第二部「移住と定着について」にはそれぞれ、「時間のメキャニックス」、「空間のメキャニックス」という副題が付けられており、アメリカ文学における荒野／文明、移住／定着の差異が、時間と空間という観点から論じられている。実は、安部のエッセイでも「移動社会」／「定着国家」における時間と空間の差異が扱われている。

まして、今日、われわれの住む大都市では、たぶん世界大戦という、全空間の同時共鳴の余韻がまだ響きつづけているためもあるだろう、時間の共有感覚はすでに日常のことである。フーテン族でさえ、新宿に逃げ込んで来たアメリカ脱走兵と、すぐに友達になってしまったということだ。学生たちが、世界中の都市で申し合わせたような行動を起こしても、誰一人その空間的偶然性に驚いたりする者はいない。誰もが同時代の感覚を、いつか知らずに身につけてしまっていたからだ。育ちすぎた国境が、内部で辺境の卵を孵化させてしまったらしいのだ。<sup>(53)</sup>

ただ、一つだけ、都市に固有の性格として、空間密度の圧縮ということがあげられるだろう。この集中化は、相対的に、人間の移動効率を高め、人間関係も多角化する一方、

無名性も強められる。農村生活の定着性にくらべると、都市生活者のパターンは、驚くほど移動民族的な傾向をおびて来るのである。<sup>(54)</sup>

安部によれば、農村の定着性とくらべて、移動民族的な傾向が強い都市では空間密度が圧縮されており、世界中での時間の共有感覚が見られるということだろう。ここに安部と大橋の差異がある。大橋はジェイムズ・ボールドウィン (James Baldwin, 1924-1987) の『もう一つの国』(Another Country, 1962) や『エローム・デイヴィッド・サリンジャー』(Jerome David Salinger, 1919-2010) の『ライ麦畑でつかまえて』(The Catcher in the Rye, 1951) を例に取りながら、空間的な運動(移住)をとおして都市空間から脱出することが不可能であることを「メトロポリスの憂鬱」だと捉えている。<sup>(55)</sup> 安部の試みはむしろ、都市における同時代の感覚や国家を内部から破壊する移動性を発見することであった。

また、安部「内なる辺境」が扱っているユダヤ人作家と大橋がここで扱っているユダヤ人作家が同じ作家達であることも重要である。大橋は「都市生活者である数多くのユダヤ系作家から、すでに新鮮な、そしてアメリカ的な数多くのすぐれた作品が生まればじめている」<sup>(56)</sup>と述べ、ユダヤ人作家として、サリンジャーやバーナード・マラマッド (Bernard Malamud, 1914-1986)、『フィリップ・ロス』(Philip Roth, 1933)、『ノーマン・メイラー』(Norman Mailer, 1923-2007)、『ソール・ベロー』(Saul Bellow, 1915-2005) の名前が挙げられている。<sup>(57)</sup> 安部が「内なる辺境」で名前を挙げたア

メリカのユダヤ系作家は、アーウィン・ショー (Irwin Shaw, 1913-1984)、『ノーマン・メイラー』、『ソール・ベロー』、『フィリップ・ロス』、『バーナード・マラマッド』、『J・D・サリンジャー』、『アーサー・ミラー』である。劇作家であるショーとミラーを除いて、安部と大橋が共通してメイラー、ベロー、ロス、マラマッド、サリンジャーの名前を挙げていることが分る。都市と文学を論じる際に、安部と大橋が同じユダヤ系作家達に言及しているのは、安部のアメリカ文学受容を考える上で重要である。

荒野(辺境)や文明(国家)、都市における時間/空間、移住/定着の問題を共通して論じ、都市とユダヤ系作家の関係性と同じように注目している点で、安部が大橋のテクストを媒介にしてアメリカ文学を受容したことが暗示されている。

安部がホーソーンを受容した可能性があるとすれば、サルトル、大橋健三郎を媒介にして、アメリカや都市についての思想を深めたことが背景にあつたのではないだろうか。大橋が、移住/定着の問題を扱った章で、ホーソーン『七破風の屋敷』(The House of Seven Gables, 1851) の「そしてみんなに共通な、やむにやまれぬ前進! それはまさに人生そのものだった!」という一節を引用してエピソードにしているのは、ホーソーンのテクストに移住(運動)性を発見したからだろう。それは大橋が、アメリカ文学には「西への運動」を支える巨大な「空間」での「逃亡のパターン」があり、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) のウォールデン (Walden) の森への移住、ハーマン・メルヴィルの大洋への船出と同じものを、

ホーソーンの内面探究に発見しているところにも表れている<sup>69)</sup>。安部が「内なる辺境」において、アメリカ文学で表現される移住（運動）性を、国家を内部から破壊する都市の特性として捉えていたと考えると、『燃えつきた地図』における都市での失踪とは、国家からの逃亡というアナキズム（anarchism）的なものになるだろう<sup>69)</sup>。実際に、安部は『燃えつきた地図』が発表されたのと同じ年に、インタビュー「国家からの失踪」（『日本読書新聞』一九六七年一月二〇日）で「国家からの失踪が最も大きな失踪」だと言っている<sup>69)</sup>。アナキズム的な視点から、安部がホーソーンのテクストで描かれた失踪を応用した可能性があるのであるだろうか。

## 五、おわりに

本稿では、ホーソーン「ウエイクフィールド」を補助線にして安部『燃えつきた地図』を論じ、更に安部がホーソーンを読んでいたとすれば、どのような経路でアメリカ文学を受容していたのかを論じた。そのきっかけは、オースターが『ニューヨーク三部作』を書く際に、共通して失踪者を描いたホーソーンと安部のテクストの両方から影響を受けていたこと、及びメリヴェイルが安部とホーソーンの間テクスト性を指摘していることであつた。

『燃えつきた地図』と「ウエイクフィールド」は、都市を舞台にして失踪と夫婦関係を描いている点で共通しており、単語

レベルでの類似性を指摘できる。例えば、主人公が失踪する直前に「立ちどまる」場面や「微笑」を浮べる場面が、『燃えつきた地図』と「ウエイクフィールド」の両方に共通して登場することを示した。そして、安部がサルトルの実存主義を応用しながら、「ウエイクフィールド」や山之口「ねずみ」と同じ場面を描いている可能性を提示した。

そして、安部がホーソーンを受容していたと考えた場合、『燃えつきた地図』を発表した前後のエッセイや座談会での安部の発言を、どのように同時代の言説の中で位置づけられるかを論じた。まず、安部が「隣人」／「他人」という観点からキリスト教を論じるとき、ホーソーンやアーサー・ミラー、サルトルらによってテーマにされた、魔女狩りや赤狩りによる他者の排除の問題が背景にある可能性を示した。その次に、安部の都市論にはサルトルのアメリカ論「アメリカの都市」の影響があり、安部が都市に国家への抵抗を見いだしていることを指摘した。そして、安部「内なる辺境」と同じく、大橋健三郎が『荒野と文明——二十世紀アメリカ小説の世界』において、都市／国家、移住／定着、都市とユダヤ系作家の問題を扱っており、安部が大橋のテクストを媒介にしてアメリカ文学を受容した可能性を指摘した。安部は、ホーソーンが「ウエイクフィールド」で描いた都市空間での失踪を、サルトルの実存主義を応用しながら反復させ、国家からの逃亡というアナキズム的なものへと変貌させたのではないだろうか。

【注記】

- 1 ポール・オースター、柴田元幸「私はジャガイモ」(『モンキービジネス 2011 Spring vol.13 ポール・オースター号』ヴィレッジブックス、二〇一一年四月) 九頁
- 2 巽孝之「未だ語りえぬメタフィクションたち」(『メタフィクションの謀略』筑摩書房、一九九三年一月) 一九五頁
- 3 Patricia Mervale, "Gunshoe Gothics: Poe's "The Man of the Crowd" and His Followers." (*Detecting Texts: The Metaphysical Detective Story from Poe to Postmodernism*. Eds. Patricia Mervale and Susan Elizabeth Sweany. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1999. 101-116.) 112.
- 4 初刊本は *The New York Trilogy*. (London: Faber and Faber, 1987). 『ニューヨーク三部作』は、『ガラスの街』(*City of Glass*. Los Angeles: Sun & Moon, 1985). 『幽霊だか』(*Ghosts*. Los Angeles: Sun & Moon, 1986). 『鍵のかかた部屋』(*The Locked Room*. Los Angeles: Sun & Moon, 1986) から成る。
- 5 Eberhard Alsen. *Postmodern Studies 19: Romantic Postmodernism in American Fiction*. (Amsterdam: Rodopi, 1996.) 240-250.
- 6 Paul Auster. *Ghosts*. (In *The New York Trilogy*. London: Penguin Books, 1990. 159-232.) 209-210.
- 7 Barry Lewis. "The Strange Case of Paul Auster." (*Review of Contemporary Fiction* 14.1. 1994. 53-61.) 55.
- 8 本論文における Nathaniel Hawthorne. "Wakefield." の引用はすべて *Twice-Told Tales*. in *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne Volume IX*. (Columbus: Ohio State UP, 130-140.) 130-131. 以下同様。130-131.
- 9 柴田元幸「2003年文学の旅・古典と現代——探偵になったウエイクフィールド」(『新潮』二〇〇三年一月号、新潮社) では、ベルティ「ウエイクフィールドの妻」にオースター「ガラスの街」の影響がある可能性が示唆されている(二九一頁)。
- 10 J・L・ボルヘス「序文」土岐恒二訳(ナサニエル・ホーソーン『パベルの図書館③人面の大岩』J・L・ボルヘス編、坂本雅之、竹内和子訳、国書刊行会、一九八八年三月) 一七頁
- 11 坂下昇「訳注」(ナサニエル・ホーソーン『ホーソーン短編小説集』坂下昇訳、岩波書店、一九九三年七月) 三三九頁
- 12 安河内英光は、「幽閉」する登場人物の原型としてハーマン・メルヴィルの「バートルビー」の主人公バートルビー(Bartleby)を挙げ、登場人物が「幽閉」するさまざまなテクストを論じており、オースターもその系譜に含まれている(安河内英光「アメリカの夢の裏面史」(『アメリカ文学とバートルビー現象——メルヴィル、フォークナー、バース他』開文社、二〇一一年二月) 四頁)。本稿では、「登場人物が「失踪」するテクストの原型としてホーソーン「ウエイクフィールド」を挙げ、この系譜に安部とオースターがいることを示している。最近では、「一九世紀アメリカ文学がスペイン語圏で書き直される傾向がある。ホーソーン「ウエイクフィールド」のスペイン語版が、先述したエドワード・ベルティ「ウエイクフィールドの妻」ならば、メルヴィル「バートルビー」のスペイン語版は「スペインの作家エンリケ・ビラマタス(Enrique Vila-Matas, 1948)の『バートルビー仲間たち』(*Bartleby Y Compania*, 2000) となっている」。
- 13 Jonathan Arac. *The Emergence of American Literary Narrative, 1820-1860*.

- (Cambridge: Harvard UP, 2005) 71.
- 14 波瀾剛「安部公房（失踪三部作）論——公房の都市表象と植民地体験——」（『文学研究論集一五号』筑波大学比較・理論文学会、一九九八年三月）二四八—二五〇頁
- 15 Patricia Merivale, "Gunshoe Gothics: Poe's "The Man of the Crowd" and His Followers," 111.
- 16 Richard Swope, "Approaching the Threshold(s) in Postmodern Detective Fiction: Hawthorne's "Wakefield" and Other Missing Persons." (*Critique: Studies in Contemporary Fiction* 39.3 Spring 1998: 207-227). 214.
- 17 Richard Swope, "Approaching the Threshold(s) in Postmodern Detective Fiction: Hawthorne's "Wakefield" and Other Missing Persons." 218-221.
- 18 丁熹貞「安部公房のハードボイルド受容と『燃えつきた地図』——「記録性」との関連を視座として」（『超域文化科学紀要第一七号——2012』東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻、二〇一二年一月）二〇九—二二三頁
- 19 本論文における安部公房『燃えつきた地図』の引用はすべて『安部公房全集21』（新潮社、一九九九年六月）によるものである。以下同。二九四頁
- 20 安部公房『燃えつきた地図』二九五頁
- 21 波瀾剛「安部公房『燃えつきた地図』論——作品内の読者、小説の読者、および同時代の読者をめぐって——」（『文学研究論集一四号』筑波大学比較・理論文学会、一九九七年三月）一三八—一三九頁
- 22 Immanuel Kant, *Critique of Pure Reason*. (Trans. F. Max Müller. New York: Doubleday, 1966.) xxxvii-xxxviii.
- 23 Nathaniel Hawthorne, "Wakefield." 133.
- 24 安部公房『燃えつきた地図』二九七頁
- 25 ジャン・ポール・サルトル『嘔吐』（白井浩司訳、人文書院、一九九二年一月）二〇七—二〇八頁
- 26 安部公房『燃えつきた地図』三一—頁
- 27 ナサニエル・ホーソン「ウエイクフィールド」（『ホーソン短編集 優しき少年——他十篇』佐藤清訳、岩波書店、一九三四年八月）
- 28 ナサニエル・ホーソン「ウエイクフィールド」大橋健三郎訳（『集英社版世界文学全集30——アッシャー館の崩壊／美の芸術家他』集英社、一九八〇年四月）
- 29 ナサニエル・ホーソン「ウエイクフィールド」（『ホーソン短編集』坂下昇訳、岩波書店、一九九三年七月）
- 30 ナサニエル・ホーソン「ウエイクフィールド」（『ナサニエル・ホーソン短篇全集1』國重純二訳、南雲堂、一九九四年一〇月）
- 31 Nathaniel Hawthorne, "Wakefield." 132-133.
- 32 高島清「ホーソンとモラル——「ウエイクフィールド」の解釈をめぐって——」（『立命館文学』四〇〇—四〇二号、立命館大学文学部人文学会、一九七八年二月）では、「微笑」が二度、繰り返されるのは、ウエイクフィールドにとっては失踪した二〇年間が、最初に留守にする予定だった一週間と同等の意味しか持っていないことを暗示していると指摘されている（六九—頁）。
- 33 Nathaniel Hawthorne, "Wakefield." 139-140.
- 34 安部公房『燃えつきた地図』三一—頁
- 35 山之口獏「ねずみ」（『山之口獏全集第一巻全詩集』思潮社、一九七五

年七月) 三七三—三七四頁

36 山之口貌「猫」(『山之口貌全集第一巻 全詩集』思潮社、一九七五年七月) 三二—三三頁

37 安部公房『燃えつきた地図』三二〇頁

38 安部公房『燃えつきた地図』三二〇頁

39 友田義行「映画的手法の小説化——燃えつきた地図」論(『戦後前衛映画と文学——安部公房×勅使河原宏』人文書院、二〇一二年三月) 二七五—二七六頁

40 高野斗志美(一九二九—二〇〇二年)は、『燃えつきた地図』は『《物自体》の、『いまだ名づけることのないもの存在』の世界にむかって、つまり、自己解放の可能へと、『私』を脱出させること(高野斗志美『《変形》のあとにくるもの』(『増補 安部公房論』花神社、一九七九年七月) 六一頁)を起点とした物語であると述べている。

41 安部公房「モスクワとニューヨーク」(『安部公房全集19』新潮社、一九九九年四月) 五八一—六一頁

42 安部公房、石一郎、小島信夫他「戦後アメリカ文学——ヘンリー・ミラ——とその他の作家たち」(『安部公房全集19』新潮社、一九九九年四月) 三五八—三五九頁

43 安部公房、石一郎、小島信夫他「戦後アメリカ文学——ヘンリー・ミラ——とその他の作家たち」三六〇頁

44 安部公房「私の創作ノート」(『安部公房全集20』新潮社、一九九九年五月) 一七二頁

45 守安敏久「安部公房『他人の顔』——小説から映画へ——」(『宇都宮大学教育学部紀要第五九号第一部』宇都宮大学教育学部、二〇〇九年三月)

では、『他人の顔』の変装して妻を誘惑するというテーマが、江戸川乱歩(一九四一—一九六五年)の『一人二役』(『新小説』一九二五年九月)やウォルフガング・アマデウス・モーツァルト(Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791)のオペラ『コシ・ファン・トゥッチ』(Così fan tutte, 1790)との類似性が指摘されている。しかし、主人公が「失踪」を果たしてから「変装」をして妻を観察しているという点で、ホーソーンからの影響がある可能性も指摘できるのではないだろうか。

46 安部公房『密会』(新潮社、一九七七年二月)では、失踪した妻らしき「仮面女」が病院内の祭りに登場する。ナサニエル・ホーソーン「ヤング・グッドマン・ブラウン」(『Young Goodman Brown』, 1835)でも、魔女狩りを思わせる儀式に妻が仮面をかぶって登場しており、安部がホーソーンを受容した可能性を指摘することができる。

47 同時代の日本では、映画『サレムの魔女』は松川裁判との関連で評される傾向があった(佐々木斐夫、小松茂夫、星野安三郎他「映画『サレムの魔女』と松川裁判」(『中央公論』一九五八年一月号)。松川裁判とは、一九四九年八月一七日に東北本線松川駅付近で発生した列車転覆事件「松川事件」をめぐる赤狩りの色彩の濃い裁判のこと。裁判では労働組合員らが起訴されたが、一九六三年、最高裁判所が全員に無罪を命じた。作家、広津和郎らが裁判批判を展開した(広津和郎『松川裁判』全三巻、筑摩書房、一九五五年六月—一九五八年一〇月)。

48 安部公房「続・内なる境界」(『安部公房全集22』新潮社、一九九九年七月) 三三五頁

49 安部公房「内なる境界」(『安部公房全集22』新潮社、一九九九年七月) 二二七頁

- 50 ジャン＝ポール・サルトル「アメリカの都市」渡辺明正訳（『サルトル全集第一巻 アメリカ論』渡辺一夫、佐藤朔、渡辺明正他訳、人文書院、一九五三年七月）二二三頁
- 51 ジャン＝ポール・サルトル「アメリカの都市」三六頁
- 52 野村喬「安部公房——燃えつきた地図」を視座として」（『国文学解釈と教材の研究』一九六九年二月号、學燈社）五〇頁
- 53 安部公房「異端のバスポート」（『安部公房全集22』新潮社、一九九九年七月）一四九頁
- 54 安部公房「内なる境界」（『安部公房全集22』新潮社、一九九九年七月）二二七頁
- 55 大橋健三郎「メトロポリスの憂鬱」（『荒野と文明——二十世紀アメリカ小説の世界』研究社、一九六五年二月）一八五—二〇五頁
- 56 大橋健三郎「メトロポリスの憂鬱」二〇五頁
- 57 大橋健三郎「メトロポリスの憂鬱」一八七—一九二頁
- 58 大橋健三郎「移住と定着について——空間のメキヤニックス」（『荒野と文明——二十世紀アメリカ小説の世界』研究社、一九六五年二月）七頁
- 59 大橋健三郎「汽車のなかでの幻想——トマス・ウルフの次元」（『荒野と文明——二十世紀アメリカ小説の世界』研究社、一九六五年二月）九三—九四頁
- 60 フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ（Gilles Deleuze, 1925-1995）は、生前最後の著書『批評と臨床』（*Critique et Clinique*, 1993）で次のように言っている。「メルヴィルの描く独身者パートルビーは、カフカの作品の独身者と同様、「自分が散歩する場所」、つまりアメリカを見出さなければ

ならない。アメリカ人とは、イギリスの父親的機能から解放された者であり、碎かれた父親を持つ息子、あらゆる国民にとっての息子だ。すでに独立前に、アメリカ人は国家の複合体、アメリカ人の使命と両立する国家形態を考えていた。ただし、アメリカ人の使命とは、「昔ながらの国家機密」を、つまり国民だとか、家族だとか、遺産だとか、父親だとかを再構築することではなく、なによりも世界を、兄弟の社会を、人間と財の連邦を、アナーキストとしての個人から成る共同体を構築することであり、それはジェファアソンやソローやメルヴィルによって植え付けられた使命である。」（ジル・ドゥルーズ「パートルビー、または決まり文句」（『批評と臨床』守中高明、谷昌親訳、河出書房新社、二〇一〇年五月）二七七—二七八頁）。都市を舞台にして共同体から離れた単独者を描くメルヴィル同様に、ホーソンもまた、失踪者を描いて共同体の外部を目指す。ソロー『ウォールデン』（*Walden, or Life in the Woods*, 1854）では、共同体から離れて森という「辺境」で生きるソロー自身が描かれている。ソローやホーソン、メルヴィルらのアメリカン・ルネサンス（*American Renaissance*）文学では、ドゥルーズが言うように「アナーキストとしての個人から成る共同体を構築すること」が目指されたのだ。安部もまた、共同体の外部を目指すアナキズム的な作家であった。共同体の外部を目指すアナキズムは、時間と空間を越えてソローやホーソン、メルヴィル、安部、ドゥルーズに共通するテーマだったのだと言つてもよい。

- 61 安部公房「国家からの失踪」（『安部公房全集21』新潮社、一九九九年六月）四二七頁

（九州大学大学院比較社会文化学府修士課程二年）